

## 《信貴山縁起絵巻》の制作背景に関する一考察

—二条天皇との関わりをめぐる—

苦名悠(京都大学大学院)

12世紀の成立と目される《信貴山縁起絵巻》(全3巻)は、信貴山の修行僧命蓮の奇跡譚及び、その姉の尼公が信濃から旅をして命蓮と再会を果たす物語を描いた絵巻である。本作については多くの研究が蓄積され、その制作が京都において宮廷絵師によってなされた可能性の高いことが示されたが、その注文者、制作年代、制作目的等は未だ明らかにされていない。本作の有効な比較対象たり得る同時代の作例が少ないことが、その所以である。

発表者は、様式分析によって本作の制作年代はおおよそ12世紀半ばに位置付けられると考えるが、様式的観点のみから本作の制作背景についてそれ以上詳細に論じることは難しい。それゆえ発表者は当時の社会状況に鑑みて、作品の制作目的という観点から本作の制作背景について考察する。

結論からいうと、本作の制作を企てた人物として発表者が想定するのは、本作に関わる研究においてこれまで閑却されてきた二条天皇(1143～1165、在位1158～1165)及びその周辺の人々である。二条天皇は、父後白河院の院政に対抗し親政を目指したことが知られる人物であるが、本作の成立をその時代に位置付けることは、上記様式分析の結果と矛盾しないと考えられる。

二条天皇と本作との関わりを論じるに当たってまず注目されるのは、第2巻において命蓮の法力によって病から救われる「延喜の帝」、すなわち醍醐天皇である。醍醐天皇は親政を行ったことで名高く、その治世は後代に「延喜の治」として、村上天皇による「天曆の治」と並び称された。これら両天皇による治政を理想とする「延喜天曆聖代観」は12世紀に盛行し、親政を志向する二条天皇にとって醍醐天皇は重要なロールモデルであったと考えられる。実際に、12世紀成立の諸史料に見られる二条天皇の事績や特質には、醍醐天皇におけるそれと通じるところが多い。また、二条天皇の支持者であった藤原伊通が二条天皇に捧げた意見書である『大槐秘抄』には、伊通が抱く復古的な思想と延喜・天曆の聖代に対する憧憬の念が明確に現れている。したがって、醍醐天皇が仏法による守護を受け、病から回復するという物語は、二条天皇及び親政派の人々にとって魅力的なものであったといえよう。

次に注目されるのは、第3巻で尼公に夢告を与える東大寺の大仏である。本作において大仏は極端に大きく描かれるが、二条天皇は村上天皇の時代に倒壊した東大寺南大門の再興事業に取り組んでいたことが知られる。また、東大寺は聖武天皇が鎮護国家のために建立した、王権の象徴ともいえる寺院であった。すなわち、ここで大仏の威容を強調することには、二条天皇の業績を顕彰するとともに王権の強大さを示すという意味があったと考えられる。

これらの考察により、本作は二条天皇親政への気運が高まった1160年代前半に、親政を肯定することを意図して、二条天皇及び親政派の人々によって制作が企画された蓋然性の高いものであると結論付けたい。